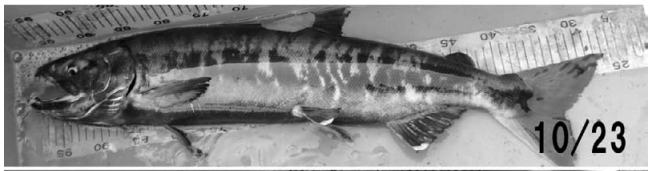
新潟の水辺だより
niigata-mizubenokai report
Vol.77
●編集発行
特定非営利活動法人
新潟水辺の会
●発行日
2009年12月01日

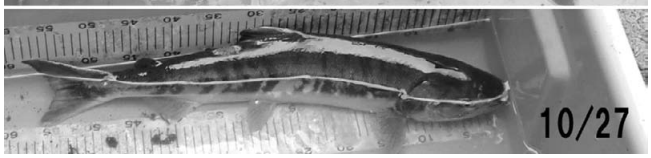
report 01

ついに千曲川へ鮭が遡上　水枯れの大河・信濃川にサケの道が拓いた

私の携帯に、西大滝ダム魚道の監視をしていた小田切 勝さんより、千曲川で鮭1尾(体長70cm メスで3.2kg)が発見されたと第一報が入ったのは9月30日午後4時半過ぎであった。

この鮭は高水漁協の方が見つけたときは弱ってはいたがまだ生きていた。水中にはもう一尾の鮭が居たようで、ペアで産卵場所を探していたのだと思う。
昨年は3年ぶりに3尾の鮭が確認されたが全て死んだものであった。今年は生きた鮭が発見されたのだ。更にその後10月23日に1尾(体長72cm 雄3kg)27日に1尾(体長55cm 雌2.5kg)が西大滝ダム魚道にて捕獲されたが調査後、上流に放流された。この鮭が西大滝ダム上流まで遡上した事は、快挙という他はない。





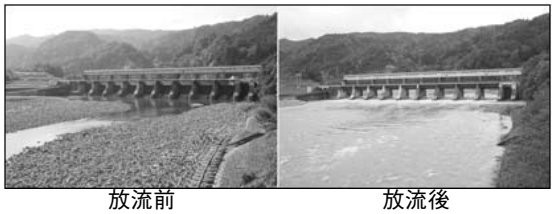
この鮭の遡上は新潟日報、信濃毎日新聞、長野朝日放送、テレビ新潟などが取り上げた他、全国紙でも大きく報じられた。

かつて信濃川・千曲川は全国屈指のサケの産地として知られ、河口から約300km上流の松本や上田、上高地までサケが遡上した記録が残っている。

しかし、昭和10年代に始まった電源開発事業によって、ダムや発電所が作られると、洪水時以外は一滴の水も流れない無水区間や、極端に水が少なくなった減水区間が出現し、大河・信濃川は、「生ける屍の川」となり、鮭の遡上・降下が激減した。

長野県は1980年より20年間に、899万尾の鮭の稚魚の放流を行ったが千曲川に帰ってきたのは48尾の結果で、「税金の無駄遣い」「発電所のタービンに鮭の稚魚が巻き込まれて亡くなるのは、子どもの教育に悪影響」と言われ事業を終えた経緯がある。

しかし今年の信濃川は、宮中取水ダムの発電所でJR東日本による違法取水(`02年から7年間で3.1億m^3)が発覚。水利権の取消しを受けて今年3月、宮中ダムのゲートが開けられかつての様に水が流れ、水枯れ状態であった信濃川が甦った。


放流前　放流後

新潟水辺の会では4年前より地球環境基金の助成を得て、産業放流や教育放流でない市民による河川の環境の為の放流として「鮭の稚魚・市民環境放流」を2007年5.5万尾、2008年13万尾、2009年20万尾の鮭の稚魚放流を信濃川と千曲川及び犀川で行ってきたが、宮中ダム全量放水が重なったとはいえ、その成果が大きな実を結んできたと考える。

今年度より3年間、三井物産環境基金の助成を得て、鮭の稚魚降下実験の他、西大滝ダム魚道に遡上を確認するための監視ビデオカメラを9月20日に設置した結果、25日午後10時26分魚道を力強く上る鮭をカメラが捉えた。

また、高水漁協の組合にお願いして、西大滝ダム魚道に遡上する鮭の監視作業を10月末まで行っていただいた。

平成21年12月5日(土)「信濃川・千曲川シンポジウム～信濃川のサケ復活と市民環境放流～」を、新潟市で開催します。
この度の報告などを行いますので、多くの方々のご来場をお待ちしています。

世話人　加藤　功

■水辺レポート

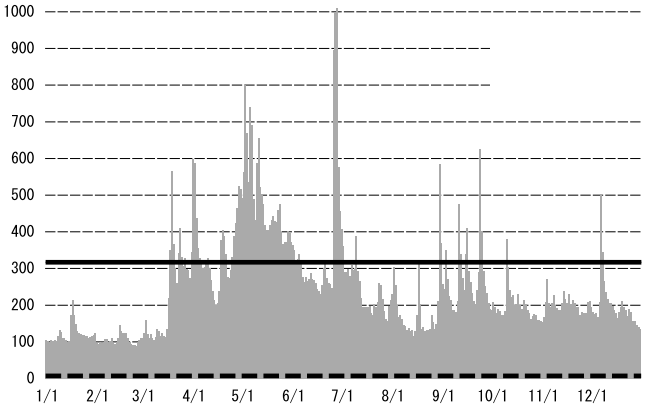
report 02

大河信濃川と人のつきあい

～河川環境と利水の調和に向けて～

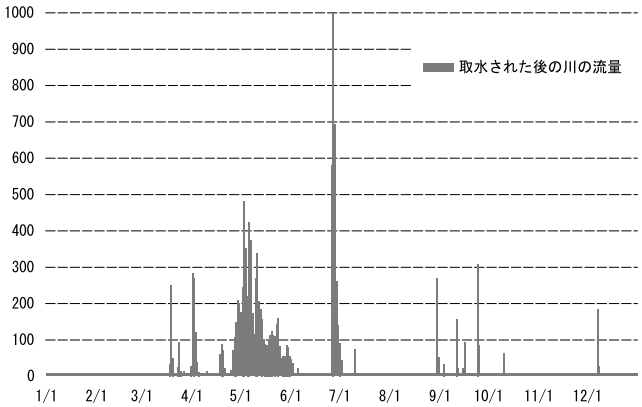
十日町市付近の信濃川は、平均流量で278m^3/sの水が流れています。一級河川でも平均流量が100m^3/s以上の川は20河川もありません。このように信濃川は、とても多くの水が流れている川なのです。そして、季節に応じた変動がある川(グラフ1)でもあります。信濃川は3月の下旬ころ、

グラフ１：信濃川の自然な流況
（信濃川宮中地点　平成８年）



急に雪解けによる流量の増加がはじまり、6月くらいまで安定して流量が多い状態が続きます。その後、流量は減少傾向となるものの梅雨の影響をうけ流量は変動します。そして、夏は平均的に流量が少ない時期になり、夏の終り頃には台風による突発的な流量増加が起きる秋の変動になります。秋が終わり、冬になると安定して流量が少ない時期が続きます。冬の状態は春の雪解け出水により終わり、また同じようなサイクルが続くのです。このよう流況が自然な信濃川なのですが、十日町市の宮中では、JR東日本によって最大で317m^3/sの取水が行われ、流況は全く違うもの(グラフ2)になっていました。平均流量よりも大きい値の取水が認められており、年間の利用率は平均で8割にもおよんでいました。317m^3/s以上の流量となる方が少ないので、一年間の大部分が維持流量の7m^3/sのみの流量で、本来あるはずの豊富な流量も、季節に応じた変動もない川となっていました。

グラフ２：取水後の流況
（信濃川宮中地点　平成８年）



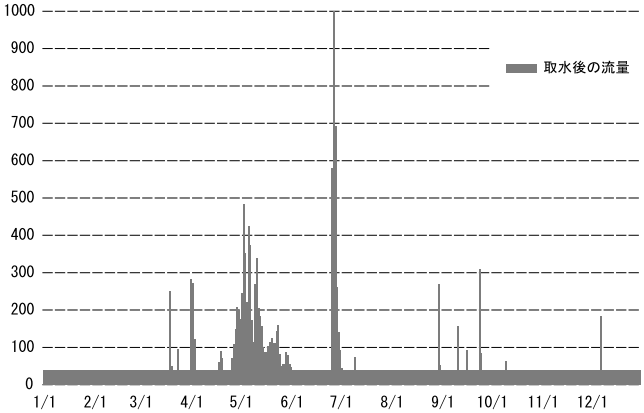
今現在は、JRの不正取水により水利権が取り消され、信濃川に滔々と水が流れています。このままの信濃川が続くことがとても望ましいのですが、JRにとっては東京の電車を動かす重要な発電です。JRは水利権の再取得のための活動を始めており、いずれ取水は再開されることも十分に考えられます。結局は、また水を取られてしまう信濃川に戻ってしまうのかという気もしますが、少し見方を変えてみると、これは改めて水力発電を考え直すチャンスでもあります。これまでは、30年に一度の水利権の更新があっても、取水事業者の立場の方が強く、すでに取得している最大取水量が最優先で、沿川住民は維持流量を増やしてくれという要求しかできませんでした。しかし、今の立場は対等、むしろ沿川住民の方に主導権があるような気がします。これまでは無視されてきた様々な要件を尊重し、利水を決めることができるのです。

私は、「人は水を飲む、農作物を育てるときも水を使う、水を使わずに生活することはできない。また、電気もたくさん使って生活している。水力発電であっても我々の生活のために水を使うのは同じである。しかも、水力発電はCO_2の排出量が少なく、安全な発電方法である。」という認識です。

しかし、CO_2の排出量が少なく地球にはやさしいが、信濃川には厳しい、電気は首都圏の電車を動かすのに使われて首都圏に人々には優しいが、沿川の人々の目の前には、石の川原だけが残される厳しいものという、これまでの水力発電ではいけないと思います。取水を再開するなら、水深、水量、生物、景観、遊べる、沿川の人々が川と昔とおなじ付き合いができる、昔と同じ匂い・水質など、できる限り信濃川らしさが残る利水をすべきだと思います。

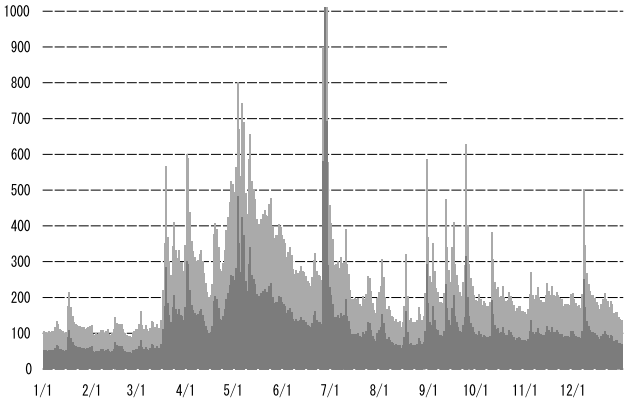
信濃川らしさが残る利水に、もちろん水量は重要です。水がなくてはどうしようもありません。しかし、これまでの様に単に維持流量を増やすだけでは、グラフ3(信濃川中流域水環境検討協議会の提言の維持流量40m^3/sを参考にシミュレート)

グラフ３：維持流量40m3/sの放流の流況
（信濃川宮中地点　平成８年）



のようになり、信濃川らしさのある変動はなくなります。そこで、自然の変動と同じように変動する放流が必要だと考えています。取水に最大取水量のほかに、取水は流れてきた流量の何割までという規制をもうけると可能になります。宮中ダムのように最大使用水量が317m^3/sだとして、川の流量が200m^3/sとすると、これまでは193m^3/s取水して7m^3/sのみ放流となります。しかし、取水は5割までとすれば、取水して良いのは100m^3/sまでで100m^3/sは放流することになります。300m^3/s流れていれば150m^3/sの放流量となります。この取水方法にすると川の流れている流量に応じて放流も変動(グラフ4)することになります。これは、実際に行われた方法で、神通川の上流の

グラフ４：信濃川の自然な流況と変動型の放流の流況（５０％）
（信濃川宮中地点　平成８年）



支川小鳥川で流れてきた流量の約53%を放流することにした事例があります。しかし、事例は小鳥川だけで、信濃川でも同じ方法を行うとしても、何割取水の何割放流にするのか決める確立した方法はなく、色々と考えて決めなければなりません。たとえば、協議会の提言の40m^3/s以上が望ましいということを参考に、変動する放流が少ない時でも40m^3/s以上となる様に計算すると、取水は67%まで、放流は33%になります。また、せめて支川の魚野川よりは本川の信濃川ほうが流量が多い状態にしたいとなれば、少なくとも52m^3/s以上の流量が必要になり、取水は58%まで、放流は42%になります。人も川も半分ということであれば、前述した50%になります。さらに大胆な提案すると、「人の利用が優先で自然からどこまで搾取できるか」ではなく、「自然が優先で、人がどこまで我慢できるか」というこれまでとは逆の発想で、取水事業者が何とかやっていけるぎりぎりの取水の割合とするという方法もあると思います。

私が思いつくだけでも、取水する量、考え方は多様にあります。もっと様々な方法があることでしょう。実際に利水を決める際には、自然な川を見つめなおし、沿川の住民、取水事業者のそれぞれの状況や事情をふまえ検討を重ね、人だけなく自然の生き物までも納得してもらえるような折り合い点が見つかれば、と考えています。

世話人　香野　哲大

■水辺レポート

report 03

信濃川で流されて ―流速調査―

今年６月、加藤世話人から「鮭の稚魚の流下速度を調べるので、信濃川を下ってくれないか」との話がありました。一瞬、「川に放した稚魚を追いかけて下る。稚魚といっしょに泳ぐの？」と思いました。でも、良く話を聞くと、稚魚の流下速度は川の流れの速さとほとんど同じなので、ただボートに乗って流され、その速さを調べれば良いとのことでした。

ホッとしました。

９月20日(日)、いよいよ流される日がやってきました。午前８時30分、「ミオンなかさと」を横山通さん、香野哲大さん、筆者で出発しました。流速測定は、浮子を流し、ゴムボートで追跡して子の速さを測定するものです。浮子も我々も、本流を流れるものと思っていましたが、川の水量が多いために流路が複数あり、浮子は本流以外に入り込んで滞留し、我々の方も本流(激流)を避けたりして、しばしば浮子を見失いましたが、下流に行くに従って、どこを流れるか、どこを通過した方が良いかが予測

写真 -1 出発前の記念写真

できて、いっしょに下れるようになり、良い結果が得られたと思います。17時丁度、到着点の川井大橋下流に無事接岸し、約27kmの行程が終了しました。調査の結果、流速は1.4m/秒で、人が歩く速さ程度でした。つまり、十日町位からだと、鮭は１ヶ月位かけて海に出ることになります。

途中、三井物産環境基金室の稲村規子さんと戸枝邦子さんもボートに乗り、水しぶきを浴びたものの、良い経験をされたと思います。今回流されてみて、何箇所も急流：早瀬を越え、広い水面でゆったりし、本来の信濃川の姿を体感でき、良い体験ができたと思います。

最後に、陸上応援部隊の皆様(大熊会長、石月世話人、山岸世話人、加藤世話人：調査リーダー、金田世話人)、本当にご苦労様でした。

写真 -2 信濃川で流されている様子

世話人　安田　幸弘

report 04

朱鷺と新川普請まるごと博物館

「只今より、新川普請まるごと博物館の開館式を開式します」の声が、梅雨の明けぬ7月18日朝、新川の川面にこだました。霧雨の中でのテープカットには、県議会議員中原八一氏、西区長岡田一久氏など関係者が集まりテープカットをおこなって、開館を祝いスタートした。場所は、新川左岸の西川との交差地点、直下流部の空き地に3間×4間のプレハブの博物館である。

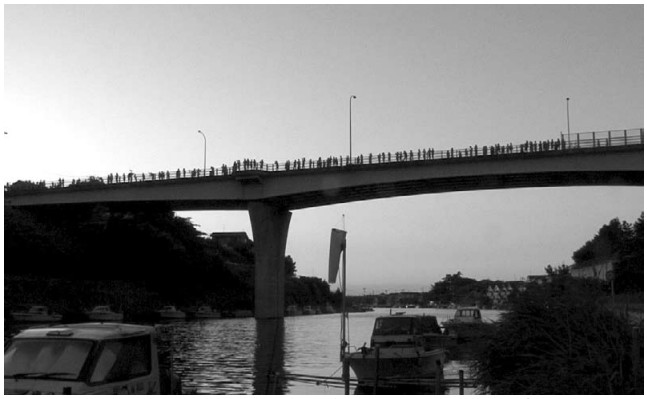
館内には、川と川が立体交差する代表的な8箇所のパネル展示と新川が西川の下を潜る立体交差の歴史を紹介した絵図、写真などの資料展示をした。他に内野町の戦後間もない頃の航空写真と近年の航空写真を対比し、町の変わりようが一目で分かる写真展示や内野町の大正から昭和初期、戦後の頃までの写真や資料などが展示された。

新川暗閘と底樋の実物大模型のある博物館

館の脇には、江戸時代の底樋、大正時代時代の暗閘の原寸大の巨大なレプリカと暗閘の銘板(新川暗閘)の3文字(新川暗)が本物、閘の字は1月と8月に新潟日報紙に捜している旨の記事が掲載されたが、発見できずやむなくレプリカを作成して展示した。

館長には、このような歴史に関心のある高橋　利男氏(元新潟県農地部勤務)にお願いして、快く引受けてもらった。館は、当初8月末で閉じる予定であったが、地域の方々からの声と新潟市からの要請によって10月12日まで延長することになった。その間、毎日の来館者への説明役は、館長はじめ越後新川まちおこしの会員により1日も休まず果たすことができた。

ところで、この開館に時を同じくして、佐渡から朱鷺が新川の金蔵坂堀割(学校山橋～新川元橋)の林に飛来して話題になり、連日大勢の見物客でにぎわっている。はじめは、どうせ2,3日でよそへ飛び去るものと誰もが予想していた。しかし、5日経ち7日経っても、早朝飛び立ち夕刻に戻ってくるのである。次第に市内外からの見物客が、毎日2～300人ほどとなり、警察官が出て交通整理や事故防止にあたる程である。


新川元橋で、朱鷺の来るのを待つ見物客

この開館に合わせて、朱鷺が新川に飛来したのは、なにか因縁がありそうである。

それにしても、なぜ朱鷺が内野の街の中を流れる新川金蔵坂を住み処としたのか。それには、いろいろと要因はあるであろう。街の中で他の鳥類のなわばりでなかったこと、近くに広大な田園が位置して餌が豊富であること、周囲には金蔵坂より高地が無く敵の襲来を発見しやすいこと。などが挙げられるが、なんといってもあの止まり木から眺めた新川のゆったりした流れの風景が、気に入っているはずである。

これは、一言でいえば、この地域が朱鷺の営巣地として、いかに環境がよい地であるかを証明してくれていることになる。新川普請まるごと博物館もこの地域の方々のお茶の間として愛され、約4000名近い方々から利用していただいた。「内野に住んでいて、新川にこのような歴史があったとこをこの館にきて始めて知りました」といって感謝され、閉館を惜しむ声が多く寄せられた。それは存続の嘆願書の署名数2700余名が表している。

今後は、館内外に展示した資料をもとに小中学校への出前授業、展示場の確保など内野町の宝を保存活用する方策が検討されることを願っている。朱鷺とともに「新川普請まるごと博物館」は、内野町の話題をさらった今年の夏のできごとでした。せめて閉館とともに朱鷺が飛び去らないよう祈っている。

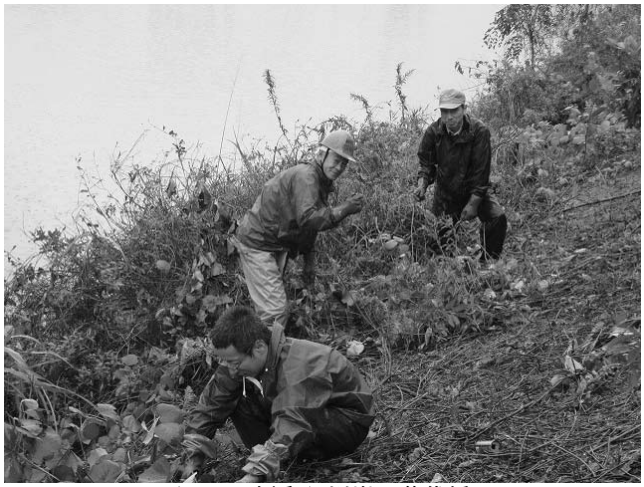
世話人　山岸　俊男

report 05

通船川清掃経過報告（川清掃を川文化とするために）

船外機付ボートによる通船川清掃は2007年6月から開始し、冬の1月から3月を除いて毎月一回第二土曜日を清掃日に定めて行ってきました。一回の回収量は大した量ではありませんが30数回重ねることで回収量、その影響共、無視できないものとなりつつあるのかなという自画自賛をこめて自己評価しています。2009年になって新たに二人の地元の新人参加がありました。これまでこの新人参加をふくめて曲がりなりにも継続できたのは皆様の支援と共に東区の広報による影響が大きく、会員の皆様と東区に感謝すると共に更なる新人参加を期待しています。

久しぶりの松崎地区での清掃



河口の森近く 川岸の葛伐採

川清掃は面白いものではありません。当会の会風である「真面目半分、面白半分」というわけには行かない所が他の活動と少し違うところなのかなと感じています。そんなわけでこの活動を継続し、川文化としてゆくためには「面白半分」を大げさですが制度設計できるかではないかと感じています。作業自体は面白くなくとも、清掃後に楽しく呑めるなら川清掃は今後とも十分継続可能であると思っています。しかし現在河口の森には休憩場所もなく、手洗いも出来ず、調理施設もありません。ですから楽しく呑めるなどという環境は現在不可能な状態です。

今年の冬、河口の森に船着場ができることになりました。そんな状況変化もあり、河口の森の一部を「川の駅」とし、休憩所を兼ねたサロンを提案しています。常時人が遊びに来てお茶が出来、時には呑めるサロンは川清掃を文化とするばかりではなく、地元の誰もが川遊びに来ることが出来、遠方の客人を接待する環境が整うことで新潟の川を軸とする交流の場になりうると思います。新潟の堀が埋められて久しく、新潟の川文化はすでに絶えていましたが此処から川文化を再生させる拠点とすることが出来ると確信しています。

川は人の下僕ではなく、それ自身自然を体現し、人に対して無償の果実を提供してきましたがその意味するところを深く考えることを忘れています。そのことで川は沈黙を始めて久しくなりました。あらゆる自然を自分に利するための計量化できる相手として考える文明はすでに限界を迎えていると感じています。『世界を等価交換の原理だけで支配できると考えるグローバル資本主義を向うに回して、交換、贈与、純粋贈与の三位一体を原理とした社会を復元しなければならない』と中沢新一がカイエソバージュの中で書いています。それが具体的にどんな形となるのかはこれからの問題なのでしょうが持続する川掃除は川の乱雑さを減少させるという意味では『エントロピーの減少』であり、自然の復元に資するという意味では自然の『純粋贈与』を回復することなのかもしれません。いずれにしても川掃除は自然の一つとしての川を愛する行動であり、そのことによって沈黙している川が再び多くを語りだす時を待つ行為でもあります。それが通船川から始まるとしたら男一匹冥利に尽きるというものだと思っています。＜ちなみに川は女です。＞

世話人　横山 通

report 06

つうくり市民会議報告 & 通船川・舟着き場計画

■つうくり市民会議のこれから

市民会議2009は、会議の内容よりも会議そのものの存在力が希薄になっているのが問題と感じた。つまり、会議での合意形成は重要だが市民会議の発足時の存在意義から進化していないことだ。

9月12日(土)新潟市立沼垂小学校体育館を会場に田中和昭校長や篠田市長の参加で開催された。昨年同様「通船川人生ゲーム」の開発運営の熊倉さんや大橋さんの協力と沼垂小児童の発表、父兄参加などで盛り上がった。

沼垂小5年生 から栗ノ木川ルネッサンスプロジェクトとして中身の濃い『環境調査報告』。万代高校端艇部からは国体参加の中での報告があった。メインのわいわい川談義では、企業参加がない課題もあったが会そのもの認知度を上げるべきという指摘があった。

しかし「会議」という名称が人を寄せ付けにくくしているのか住民参加はいつものメンバーだった。当初の①「何を目指しどこをどんな整備をどのように進めるか」のハード整備課題は未整備の川岸散策道のように残るが、②再生した川をどのように楽しく活用し、管理し、より広範な流域住民に持続的に親しまれるようにするかというソフト重視の段階に入っているといえる。

■青少年の川使いの庭へ

1997年の河川法改正を追い風に、全国の先頭を切って「官民協働パートナーシップ」での川の再生は、他県でも広範な仕組みづくりとして始まっており先を越される状況にある。という訳でさらに脱皮した取組の萌芽が期待されている。その一つが、カヌー国体などに出て活躍中の新潟市万代高校端艇部の「栗ノ木川桜祭り」での継続的な参加実践である。彼らはクラブで40艇のカヌーを操り、つうくりの川面を庭のように楽しんでいるように見える。その彼らが川への感謝の形として、子ども達の舟漕ぎの指導をしてもいいと言うのだ。そのためにカヌーを使って川掃除まで参加している。そう考えると、つうくり市民会議からよりソフトな『市民アクション快会』など現場に近いプログラムでの脱皮が課題だ。例えば2010年は、商店街や川沿い企業の協賛によるつうくり駅伝やオリエンテーリングなどレク的な祭りなどへ脱皮した形で再スタートを図りたい。そのキッカケにつうくりの川舟港ネットワークがある。

■川とまちとの接点、河口の森に桟橋登場

通船川と栗ノ木川が合流し、ポンプでくみ上げているのが山ノ下閘門・排水機場である。阿賀野川とつながる津島屋閘門・排水機場、栗ノ木川紫竹排水機場で閉ざされたつうくりの川はまさに運河そのものだ。だがいままで運河利用は木材筏のみだった。そこに子ども達の乗船体験や高校カヌークラブ、川そうじ舟、子ども環境会議、乗船観察などでの利用が頻繁になれば運河水面が少し魅力的になってくるはずだ。

新潟地域振興局の河川担当者も頑張って予算取りを行い、ようやく本年中の『舟桟橋』実現の目処が立ってきた。通船川河口の森は、1998年の市民会議立ち上がり直後にその保全や改修について議論した場所。途中8月に内水面水害が発生し激甚特別対策事業が導入され河口の森の形も二転三転した。その後官民協働での森づくり後に焼島橋の付け替えがあり、森の復元のあり方を議論してきた。その河口の森の矢板護岸の上に、概ね長さ10数m、幅2mくらいの桟橋ができる。当会や高校生が川掃除や川利用をしている場所に、官が汗をかいて桟橋を造って支援する。まさにつうくり官民協働の極意だ。我々はその上で川辺の舟小屋を市民(自)力で建設して市に寄付し、高校生や県立大生の活動を引き出す予定である。桟橋は日常的な川利用を引きしつうくりの脱皮を促すと期待される。

副代表　相楽 治

新潟水辺イベント情報　新潟水辺の会

12 月 5 日 (土)
`09 年新潟水辺シンポジウム
～信濃川のサケ復活と市民環境放流～
時間 :13:30 ～ 17:00
会場 : ホテルディアモント新潟
参加費 : 無料
内容 :
・ビデオ上映 千曲川・西大滝ダム魚道設置の監視ビデオカメラ映像
・新潟の水辺賞授賞式
・基調講演 演題 :「越後のたから、サケを守る」
講師 : 戸叶 恒 氏 (独立行政法人 水産総合研究センター 日本海区水産研究所課長)
・調査報告 宮中ダム変動型維持流量放流 香野 哲大 (NPO 新潟水辺の会 世話人)
・宮中・西大滝ダム魚道ビデオ監視 山岸 俊男 (NPO 新潟水辺の会 世話人)
・パネルディスカッション
「ついに千曲川にサケが遡上 今後の課題と展望」
【パネリスト】
高橋 大輔 氏 (長野大学環境ツーリズム学部 准教授)
伊東 芳治 氏 (長野県高水漁業協同組合 組合長)
長谷川克一 氏 (中魚沼漁協組合長・信濃川をよみがえらせる会会長)
石月 升 (NPO 新潟水辺の会 副会長)
【コメンテータ】戸叶 恒 氏
【コーディネーター】大熊 孝 (NPO 新潟水辺の会会長)
問合せ : 電話 025-264-3191

3 月 20 日～ 22 日 (予定)
サケ稚魚放流 & シンポジウム
内容 : 信濃川千曲川でのサケ稚魚市民環境放流 & シンポジウム
問合せ : 電話 025-264-3191

編集後記 : 新潟市市民活動支援センター (新潟市が管理し、運営協議会が運営しているボランティアセンター) の代表をしている関係で新発田市の活動団体を集めた懇談会で講師をしてきました。懇談会では古い付合いの加治川ネット 21 や新発田川を愛する会など 30 団体近くが集まり、互いの活動報告や課題などをワークショップ形式で発表し合い、有意義な交流会になりました。その中で問題になっていたのは、若い人が入ってこないとか活動資金が足りないとか、人とお金に関する事でした。新潟市内のほとんどの団体も事務所を持ち、専従を雇えるような財政状況には無いようです。アメリカでは個人や企業から寄付を集め、活動団体に資金援助をする財団が各地域にありました。山形県でも「やまがた社会貢献基金」という制度があり、企業から 1 億円以上の寄付があったそうです。新潟でもそのようなシステムが必要と感じました。　編集人 : 森本　利

入会案内

この会は、遊び半分・真面目心半分で活動しています。
ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。
自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。
今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。
この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

■設立年 :1987 年 10 月 15 日■目的 : 水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。■代表者 : 大熊 孝 (新潟大学名誉教授) ■会員数 : 個人 212 名・法人 11 団体 (2009 年 11 月 15 日現在) ■活動 : 信濃川・千曲川の大河復活活動 / 都市河川通船川・栗ノ木川再生活動 / 重文萬代橋を核とした水都新潟の創造 / 会報「新潟の水辺だより」発行 / 水辺シンポジウムの開催 / 長野県水辺グループとの交流会 // 水辺環境に関する調査・研究支援 etc. ■年会費 : 個人会員一口 1,000 円を 2 口以上、家族 (2 名以上) 会員一口 1,000 円を 3 口以上、賛助会員 (法人など) 一口 5,000 円を 2 口以上

入会申込書　　年　　月

フリガナ 氏　名		男・女 歳
特技や 水辺への想い		メールアドレス
住　所	〒 (　　)　－	
職　業		
勤務先	〒 (　　)　－	

注)紙面の都合上、縮小しています。
250%程度拡大コピーをしてご使用下さい。

●発行：特定非営利活動法人 新潟水辺の会
●事務局
〒 950-2264
新潟市西区みずき野 4-7-15 大熊 方
Phone 025-264-3191　Fax 025-264-3260
ホームページ
http://www17.plala.or.jp/mizubenokai/
メール　mizubenokai@plum.plala.or.jp
●会員数　個人会員 212 名、法人会員 11 団体
(2009 年 11 月 15 日現在)